



夷巡鳴記

第五編  
卷四

春

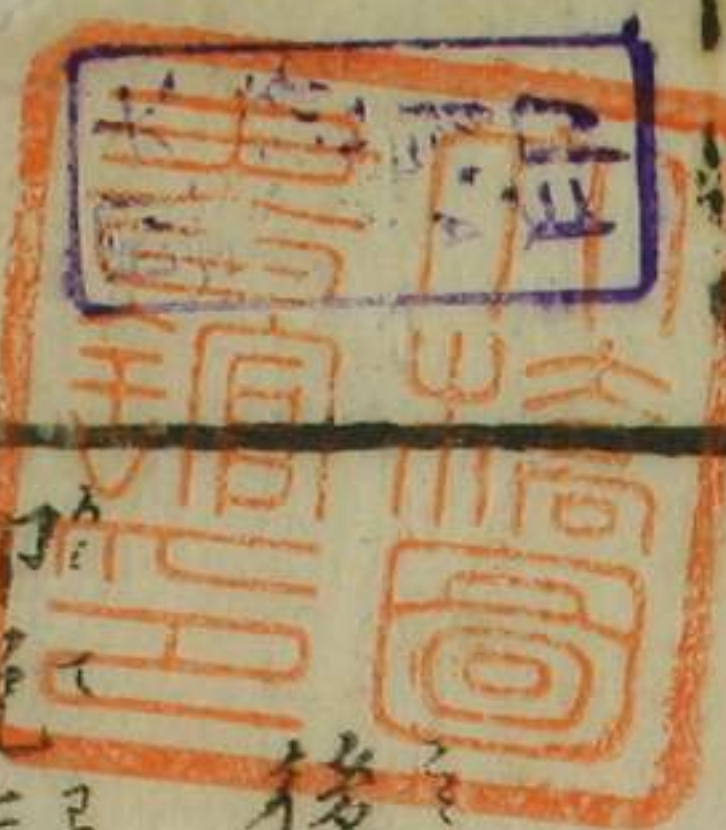


庫書	105
	30
	169
架號	6
番號	<del>188</del>
冊數	40

13  
3093  
24



吉田屋



吉田屋

朝夷巡鳴記全傳第五編卷之四

東都 曲亭主人編輯

後輯第四十七

邁遭の矢口渡  
出居の拏絆繩

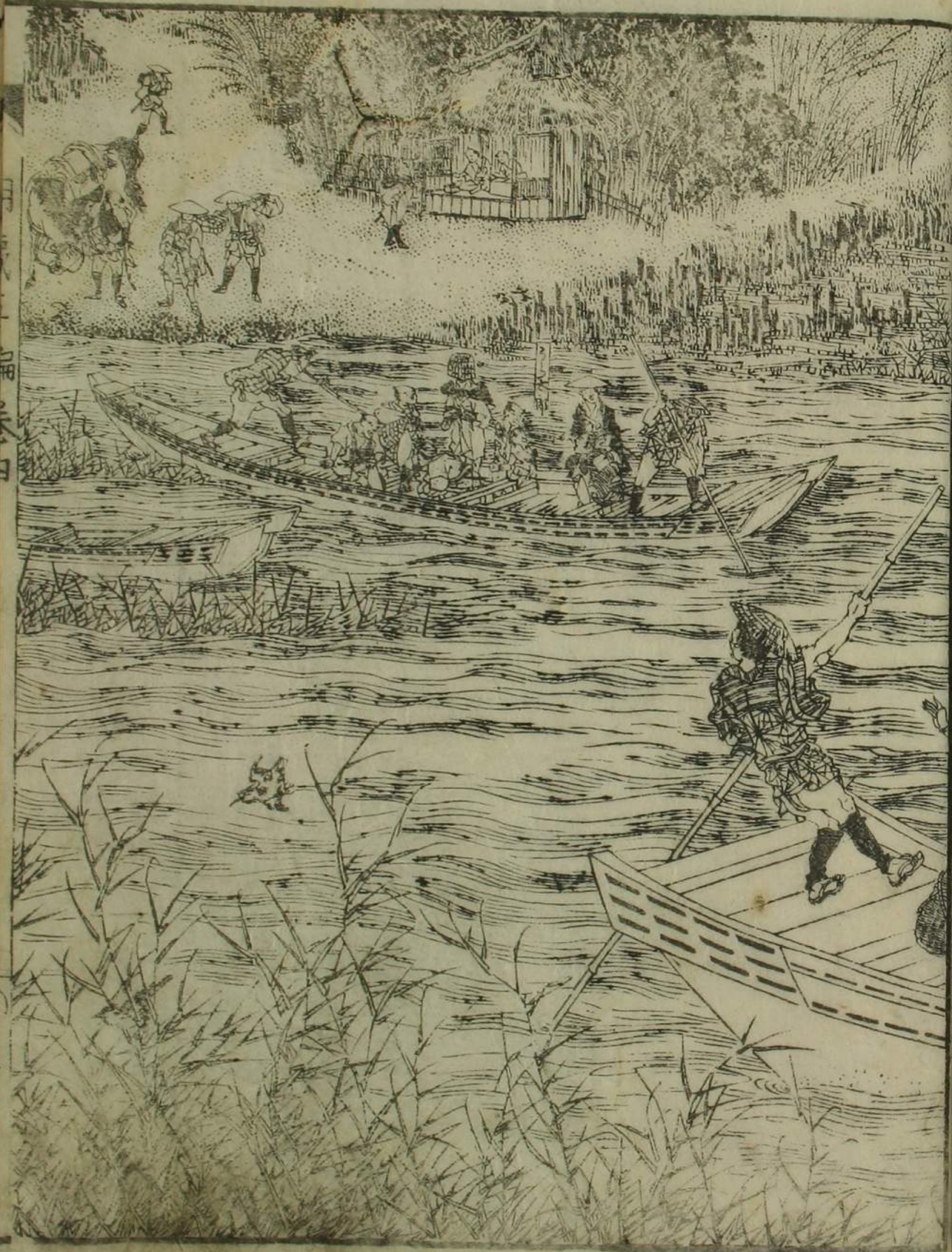
却説蒙二郎ハその日今巷路多。和田義盛の新第へ梭枝が饋物の二包を齎邁て守戸が回翰を取付てけり。ゆゑに障さゆのかれ。ゆゑに心おちる。今宵も亦彼小町客店に曉つ。この地の風聞を傍問ふ。異かる。もかる。も。バ原来冠者御夫婦も恙なく。をい。は。り。後や。心。後。を。疲。勞。を。増。せ。ど。聊。も。懈。ら。ず。未。明。の。宿。を。て。り。又。只。管。急。ぐ。よ。か。ん。ふ。十。餘。里。を。輒。く。来。り。矢。口。の。船。步。を。も。は。り。比。申。の。時。些。一。過。り。か。る。折。前。面。を。東。の。岸。より。漕。渡。の。船。を。送。り。え。ん。北。へ。人。數。衆。

月夜五編卷四

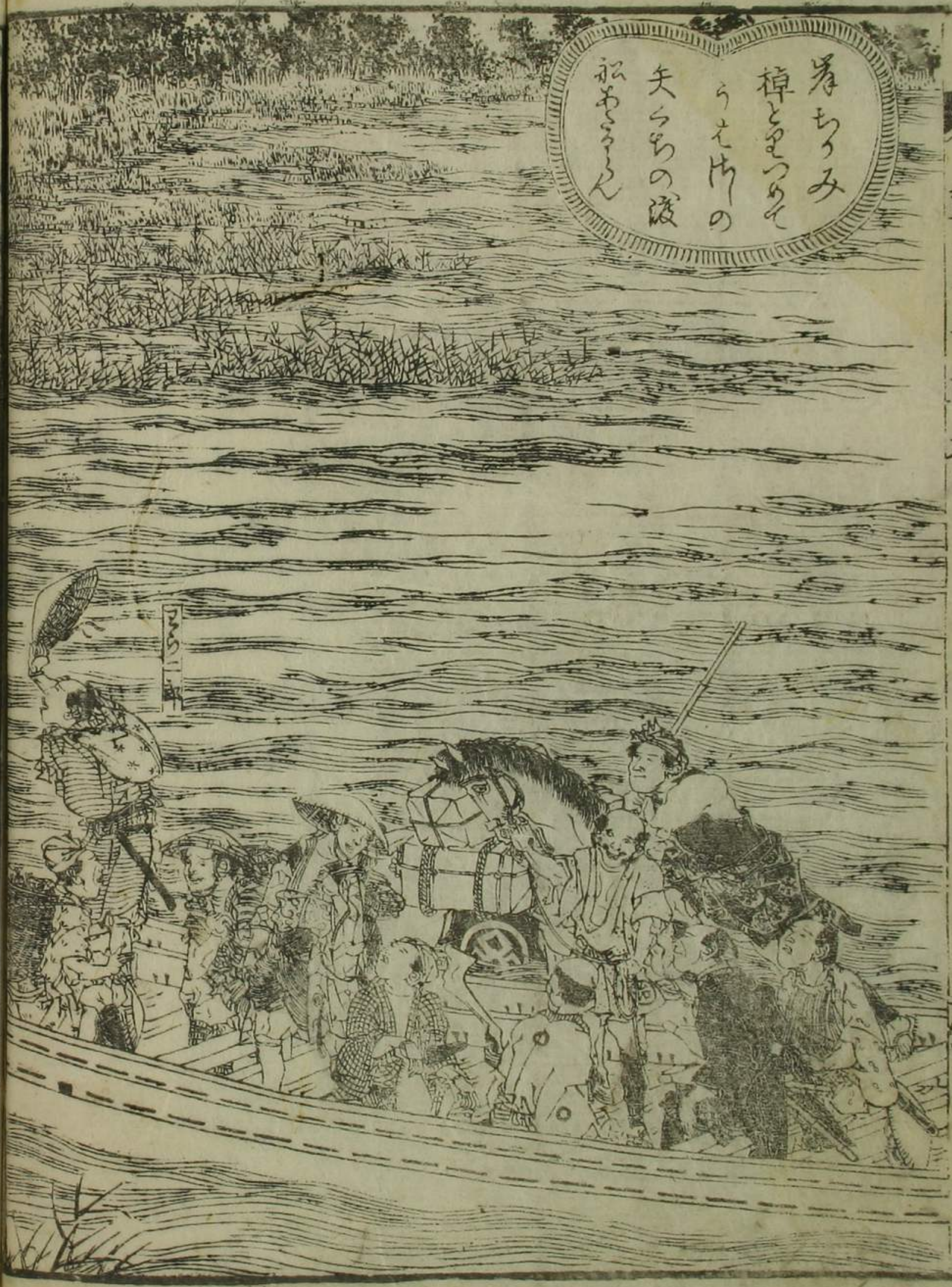
昭和九年  
七月二三日  
晴末

中は兄穂之助は似るあり。あまのふとをり。晴を定めしめびるよ。  
 紛々くもあまの兄と心忽地飛ぶ。歡ぶ甲斐もあまの船中あれが氣の  
 阿れを抗言を立つ頻りよその名を呼び被るは彼処中頭を同じ年々  
 ちやとえられども川風の烈しは吹かざりてこが呼声の定まらぬや點頭  
 やう忠志をせられ東へ枝へ西へ漕離れゆく船がれが者々間遠ざるるぬ  
 送感なき限りもあまの身をひり来る船がれが西へ返せといふや  
 心傾り焦燥のせせせせとつのおるふまが側面兩個の賤夫おのく貫は乾  
 魚を背負く西に向て立てよう件の船と送まをく彼が小壺の浦太郎は  
 ちや近属左右は造化もろろの活業をせぬをけが何本の所要より  
 あまのう人來うんとも譚かか兄のすかぬ秋とあまの名の異がれが  
 忽卒に問ふんははははこれも亦癡と撥く小猶靴を隔とく兄果ぬ夢の

覚るは似たりとて程船は東の岸に着ければみか散動と汀渚の  
 登るはこれのまかてあまの船中。船中も中びと。思ふは思ふは思ふは  
 この船に乗て再び彼処へ入る。人聚合の船を出さどあまの時も違は  
 追々といふ及ぶ。果敢あまの兄は名告り値別とともあまの  
 西の南次鎌倉四下とて索路を環りつとて。且今船の中を  
 魚商人が噂せし。兄のまをり。尚果してあまの浦太郎といひ  
 一は兄の更なる今の名をわあまの小壺といひ。鎌倉の船中。小壺の濱をわん  
 ちんがれが海を索ぬ。心的にわんがれ。熱まの面をうき。再會の素  
 懐と遂ぬ。時の至らぬ。さざれ彼商人が云云といひ。年々  
 祈る神佛の彼人の言を。後の日其処に赴た。對面せよとの示現。わんがれ。斯  
 心づる。直はあまの引えし。小壺へあまの。大事の使を仕え。稍この



舟のり



舟のり  
 舟と舟のり  
 舟のり  
 舟のり  
 舟のり

舟のり

回翰を取り終る半响ありと遅滞せざる兄子の誠ゆゑ彼方より不実之  
 とせし事。がやせし。と受難の難。瞻る空は鳴後れ方杜鵑只一声の玲しく不  
 歸とせし。けいけい。帰は不如と尋思して遂に踵を旋りし。又いづくの驛  
 走りて今宵は波谷は宿投りけし。蚤は責られ蚊は叫れて睡られぬ。隨は夫の  
 事とせし。本意を限りおれぬ。値へよ。のありけり。とちひえせ。其樂く目  
 睡もせぬ。とを曉る。旅宿の床を起出。且涼し。地風は吹れて湯島の  
 岱も来まければ。東を迫り眺る。小上總の海より日八升。辰牌を過  
 かり。亦復急ぐ程。熟る路八十餘里。鄰へか。心地してその  
 日申の比。及太田の莊へか。着ぬ。角門より入る。足音は校枝は。出迎  
 せし。と早し。と勞へ。藁三郎は背ませ。袂包を解ち。て。終校枝小邊  
 しての。見回翰。この中。あらん。れ。庖福。水も。頃日。頗。

入。自。見。れ。ば。その。程。鹿。乃。木。焚。絶。一。あ。僕。ハ。土。足。序。子。水。汲。入。れ。
 お。お。ん。お。お。姫。人。は。見。回。翰。と。を。も。お。せ。あ。う。と。の。校。枝。ハ。禁。め。あ。
 今。急。ぐ。や。ぬ。草。鞋。を。解。て。休。ひ。更。し。ぬ。姫。人。云。云。と。あ。げ。
 草。鞋。と。く。先。坐。邊。へ。あ。り。と。回。答。て。終。袂。包。を。引。提。ぐ。奥。を。封。
 日。間。中。守。直。ハ。猛。ハ。鄰。郷。の。莊。官。許。招。れ。出。中。一。終。の。あ。ど。還。見。
 どの。彼。心。は。夏。の。雲。俟。ハ。夕。の。雨。か。暑。日。消。し。左。右。不。慰。難。
 折。し。も。あ。れ。今。藁。三。郎。が。見。り。と。校。枝。を。走。り。跌。く。ま。で。一。包。を。
 且。見。姫。ハ。海。を。撈。り。珠。を。と。り。ぬ。心。地。し。を。お。お。ひ。早。か。
 見。回。翰。を。賜。り。中。を。疾。そ。の。包。を。解。て。と。校。枝。ハ。還。し。二。重。の。
 解。披。け。守。戸。が。回。翰。お。し。れ。封。推。断。し。先。光。仲。の。無。異。
 此。度。の。姫。人。進。ら。せ。し。二。包。を。早。速。に。せ。お。お。せ。し。小。云。云。と。宣。

請勸多兒かへとゆくりもくこの便り届け進み吾侪へもと珍し鮎の  
 鮎を賜て勸び侍りよ頃ハ其の殿の猛は移徒の月をりおきて今基路の東に  
 御館へよふ移らせぬ侍局をの鹿破る何事もござらつた侍は御細  
 後の日中をこれらのおとすう一史と書う。且見姫ハ云々と梭枝が讀むとち  
 笑うそハ俄頃の移徒ゆく倉卒の折りよまきよく整へられるをそをこの  
 ををせぬか。誠心申とおれ。あやめ郎の兒回翰をとておつう包と  
 叔母前の天をかくぬ誠心申とおれ。あやめ郎の兒回翰をとておつう包と  
 ひび。とこの一包を披たぐりよふ回翰とわがためのおとど。曩より贈りくる。  
 尺素の封皮を断るの。像見の扇を巻篋に舊の伏せ返れりあつくいふ。  
 とぞりお主後忽地真醒る。あやめ郎の兒回翰をとておつう包と。曩より贈りくる。  
 翰の中はありもぬ。紫の服帯包を解披けこれ中もこの副翰を包篋  
 と返されり。計りなりの限りもなれば。この尺素を返り筆は畏あを心よ

あやめ郎の兒回翰をとておつう包と。曩より贈りくる。  
 引之てえれば二首の歌あり。忘れてもこれや。汲んこれあも高野の里に玉川の  
 年魚三行半は書る。是疑念くもわぬ光仲の跡。且見姫ハ返りかへり  
 うち吟して梭枝ハ何と笑ふを是ハこれ弘法大師の。忘れても汲わぬ。ん旅への  
 高野の奥の玉川の水とあませぬ。歌をよ。汲んこれあも高野の里に玉川の  
 清はな愛く旅人の玉川の名を忘る。汲んこれあも高野の里に玉川の  
 歌のあやめ郎の兒回翰をとておつう包と。曩より贈りくる。  
 云々と詠あひ。とひびと。あやめ郎の兒回翰をとておつう包と。曩より贈りくる。  
 汲んこれあも高野の里に玉川の。清はな愛く旅人の玉川の名を忘る。汲んこれあも高野の里に玉川の  
 とぞりお主後忽地真醒る。あやめ郎の兒回翰をとておつう包と。曩より贈りくる。  
 翰の中はありもぬ。紫の服帯包を解披けこれ中もこの副翰を包篋  
 と返されり。計りなりの限りもなれば。この尺素を返り筆は畏あを心よ

愛やいと詠ありのやうをあらわむと 葎の葎を校枝に取らして元あふは軒の  
 舊の俣やと只一ツを彼らに留められりとわがしを引りて復りてんふ  
 軒の色の何となく初は変りしやうに詠れ歌はるの故とそふも疑ひ能  
 かり折らる畜猫の軒の香をとも喚慕せ且見姫の後方より袂の下と潜りて  
 器の中を軒ひら爪推立り引落を校枝にうつろく噫姑蘇は正かたを  
 せほもあれ退むを叱きどふ 軒引衝く些も放る眼を光の背と振りて  
 うかりとと 嘯鳴威して片隅の簀戸のほろりへを邁るか 嘯鳴の件は軒を  
 啖ひ竭はとええ 猫は忽地四足と乱くうも遠くを教回問苦む声の  
 悲しく夥しく血を吐くそが 俣息ハ絶りけり 殊に怪し形勢はあはれ 駭く主従ハ  
 驚れ 猫をいと惜むも 竟りとも甲斐ありと 且しく且見姫ハ沈し  
 頭を擧て涙をぐむ目と押拭ひ 喃校枝曩は 吾侪が封し 軒のあれ聊

異あぶくも必ばりし 斯まを烈しく物を害す毒を加えり 丈夫は葎の  
 誰が所為あんはと 且見が所行と坐は猜し憎も飽とを  
 筆の筆は怒りの色を離別の状に擬へ 三十一字と云云と三行半の  
 書ありんや現むる 一は伎倆か何と恨む 枉其を妹伏の中を疏るを  
 吾侪ハ去らして 毒ありけりとも 曉りて返さる 丈夫は恙を  
 幸ひかれと 掃きぬる 濡衣を誰か亦を為り 乾きぬる  
 祈りし神や 捨らる 過世を忍びあむ 声も立ち泣き 校枝も俱  
 葉の 涙を曇らる 兎理りも ちか 召は 誠心の今ハ彼  
 宙の 姫は 科あふ 勸めせし 心苦し  
 譬の物も あり 軒の毒も 疑ひ 叔母の 声  
 制めく 声高し 守戸が 所為 死渠り 人は 相譚れく かう

鬼の呪役柄をせが袋の底より物の漏れ鮮を返して毒ありと明々地  
 知らんやこの中よ所以あるん蒙二部を召すもその氣あり向成はれり  
 外は形もや不覺ふ人をも疑ひを論され沈吟ども宣へば寔は然り  
 蒙二部を招きしと彼処のゆゑを問ひん姫人も問せありさうと  
 立んとする程よ次の間より人ありて校枝刀拵立ばわれその譯曲はさああげて  
 疑ひを解くは是は要時まひと呼留り且見姫ハ驚れり  
 開せし主従奔一れとるふこハ蒙二部を有る侍の趣次の間ハ編み  
 敬馬に憂ひく思念は案若む屈托の色蒼さめくうめ芝打ハ敷居高け進も  
 入のび只もと又死頭と低く黙然とてつひゆる且々蒙二部ハ身を坐行  
 障子の裡面へ入りて後方とるる引闔と額と死姫入るを切て  
 無礼と切り石のめ校枝とのもどあらん今彼件の錯悞をさう一鮮くとも

詮あくよは面をあらまされども水波果て見参よ入ると憶ひはるの趣  
 ろわしく随ふえ饋物の鮮やうと初知るとされは況毒と加れる夢  
 どもこれやあらば知られらるども通れうたを怒より醸しる苗やもゆかれ  
 夏の顔未報きん歎れをまめくまも一昨日未の比及僕ハも鎌倉へ走  
 着てはハ豫て案内ハよく知り彼若宮巷路あり和田殿の第ハめく圍  
 執接ふ件の一包と違与せよ候と一時許くその人再びゆく来つ折戸と  
 女中ハあれども守戸はハ絶てや名の違ふわがばとて終包を返されり  
 僕もまらうゆぞ否の目も使は立守戸の局のめん回翰をさうさう  
 けで六名の違ふれとハその人訝りくまふを誰殿の算多と  
 同し僕此も礎議せは若宮巷路は隠れあり和田左衛門尉義盛殿のめん  
 算よわがばとていふ人膝も鼓くまふのまどあうらるあを和田殿の





夏の破れ及びくその怨を隠むてぬ。曲報し彼地の趣に疑ひを  
 くれども解しとくれば丈夫の死疑ひをうせんと蒙三郎を鎮め  
 校枝が言もさういふ言も父母抑此度も丈夫へ消息を進せし官府の沙汰も  
 違ひと潜びる夏死の中ゆくゆく謀りたるその仇人を知りて何處へ向く  
 許の兒素より敵の威権高うとてかたき明々地より丈夫を告げ  
 さればこそそを命を捨つともその頭を齎しとて丈夫許遣られんや横の  
 傷ありとも人を殺し身を立てんや。ふが刃子伏せをよけ縁故と業は  
 時政河を故ありくつ丈夫をのいと憎と色は彼柱夏も必せんすわれ  
 燈据われば噂中も漫よその名と指ぐ。さる警が事死人の第へあは  
 しくもあはれ。そをそあとの怨や法と超人目と竊くこの消息を寄せ  
 どもあはれ今との歎たあはれやハその禍の胎を推せし浅きやうりこ心り人

身も怨てりまを只丈夫の為とのとあひハ彼飛禽の鴉の喙吹齧  
 水澤の若子姫小松かの標ハかきども濁らぬ胸と著しなく仇あもいひ易か  
 現月も日もさう入し照しあぬ世さう親を捨られ良人よ去られ誰とあは  
 存命ん絶ぬ歎た沈んより寛も科もあ人の教り入る草の原身の果と  
 さく花の赤心と見みまが丈夫とあうく苔石滴再びむぶ縁しあは後  
 世を樂しむたれ南無阿弥陀佛と唱へ臂近よ掛置れる護身刀を搦取て  
 技放さんといふば校枝ハ吐嗟と駭然と携り禁持巻のよ降そぐ涙は息  
 つらあむあも物体や姫うらなむあくしん歎たはあは乱き多ひ  
 善も悪も陽燄の命ありを明澄ハ立ん素より直心探も彼柱津日の神  
 崇小幸守るを累ねどもやうさる日の見も解はあは雪霜の迹は  
 如く梓弓春と初ん時と日を氣あぐ候せ多う初めし初大約此度の





掛て 機枝を  
且見 葉二郎  
傳む



且見 姫



元来異父の兄徳之助といふものあり。孝友の故を以て逐電して所在を尋  
 せ。年来往方を索む。きつて夫口の渡ゆく。兄と云れども船異なり。  
 おもひあつて父との折れが名告も値に別れ。聊便宜とて、鎌倉の  
 小壺の浦太郎といふものあり。兄の徳之助の果敢を以て心あつて、後  
 日彼処へ赴き、その遭んとあひあつて。あつた九夫の妾念浮世の夢と覺果て  
 今亦渡を死天三途私誓の船に乗合も。死に安んずる心の送る。脚運りけり  
 殿共偈は鎌倉山は家造り。住つたあひ比や。小壺の濱は浦太郎と  
 しかる有りや。諸をせり。兄でいふ。あつた。僕が自殺の趣き。あつた。  
 只願ひ。死なぬもの。父も。死なぬ。死なぬ。後日の栄を。俟て。千萬の金も  
 盡せぬ。諄言を。身の暇を。あつた。名残惜し。あつた。あつた。あつた。  
 目も。校す。涙を。ぬぐ。哀れあり。且見。姫の。昔。二。郎。が。自殺。の。覚。期。を。目。め。た。る。

吉田屋

吉田屋

吉田屋

巻之五二

